

史料にみる **歴史**

ビロードでできた豊臣秀吉の陣羽織

(名古屋市 秀吉清正記念館蔵)
(『社会科 中学生の歴史』 p.101掲載)

陣羽織というのは、戦国武将が出陣したとき、陣中に着用したもので、鎧よろいの上に羽織ったものである。羽織なので防寒の意味もあったが、むしろ大将としての威光を示すという意味あいのほうが強く、豪華でめだつものが好まれる傾向にあった。

実は、陣羽織が登場するのは安土桃山時代からで、陣羽織そのものが南蛮文化の一つだったのである。イエズス会宣教師がポルトガル・イスペインア（スペイン）などヨーロッパの文物を日本にもたらしたが、その一つにマントがあり、陣羽織はマントを模倣したものとされている。織田信長が宣教師から贈られたマントを好んで着用していたことはよく知られている。

信長はその1枚を越後の上杉謙信に贈っており、現在、上杉神社に収蔵されている。文化財としての名称は「赤地牡丹唐草文天鷲絨洋套」となっている。洋套はポルトガル語のカップで、英語だとケープになるが、日本語では雨具かっの合羽ばとしておなじみである。

陣羽織の素材は絹および羅紗らしゃがあったが、最も高級とされたのがビロードである。漢字で書くくと天鷲絨で、これは、それまでの日本にはな

かった織物技法なので、やはり南蛮文化そのものといってよい。その織り方は、「経（たて）または緯（よこ）に針金を織り込み、織り上げて後これを抜き取るとき、経または緯の輪奈（わな）をなしているのを切り取って毛を立たせたもの」（『広辞苑』）というわけで、かなり手がこんでおり、それだけに高級品だったわけである。

秀吉の場合、写真に示した陣羽織のほかにも、ポルトガルからもたらされたベルシャ絨毯じゅうたんを裁断して陣羽織に仕立てたものも着用しており、積極的に南蛮文化を摂取したことが知られている。

ちなみに、ビロード製品としては陣羽織のほかに帽子がある。宣教師ルイス・フロイスが初めて信長に会ったとき、手みやげをいくつか用意していたが、信長は黒いビロードの帽子だけを受け取ったといわれている。つばの広い帽子で、形が日本の笠に似ていることから南蛮笠という名前がつけられている。天正9年（1581）正月8日、安土で行われた馬揃えのとき、信長が南蛮笠で登場したことが『信長公記』の記述からもわかる。

南蛮文化の影響で、日本のファッションもさまざま変わりをみせている。その一つがズボンである。信長が愛用したズボンが安土城址に建つ摠そう見寺けんじに所蔵されている。文化財としての名称は「革袴かわばかま」となっているが、鹿革製のズボンで、股の部分が相当すり切れているので、信長が乗馬のとき、このズボンをよくはいていたことがうかがわれる。

確かに、袴とズボンは似ているといえは似ているが、やはりズボンは南蛮文化そのものであった。当時、ポルトガル人はこうしたズボンのことをカルサンとよんでおり、日本では「軽袷」の字が当てられている。注目されるのは、そのズボンに、小用のための穴が開けられ、しかも、そこには象牙製のボタンがつけられていたのである。それまでの日本の服飾にボタンを使う例はなく、ボタンも南蛮文化そのものといってよい。もちろんボタンもポルトガル語である。

ところで、この時期、ヨーロッパからもたらされたものは、時計とか地球儀といった科学分野のもののほか、ここで取りあげたファッション関係や、さらに食品、遊戯など、庶民の日常生活にかかわるものも少なくなかった。カステラ・パン・サラダなどはポルトガル語そのものであり、遊戯では、カードを意味するカルタもそのまま日本語になっている。石鹼せっけんのことをシャボンというが、これもポルトガル語のシャボンからきている。

なお、日本とポルトガルのこの時期の交流は、なんとなく、一方的にポルトガルの文物が南蛮文化という形で日本に入ってきたと思いがちであるが、実際には、逆に、日本の文物もヨーロッパにもたらされていた。その証拠となるのが、ポルトガル語になった日本語の存在である。屏風がビオンボ、畳がタタミ、坊主がボンゾとなっている。

(静岡大学名誉教授 小和田哲男)